

# 鑑賞教育と表現

## ーキャリア教育へのむすびつきー

都立桐ヶ丘高等学校教諭 若 松

### 1. はじめに

私は、平成22年3月まで特別支援学校で高校生に美術科と工業科を指導してきた。特別支援学校では、「自立活動」の授業が行われ、その観点は、私が「人はなぜこのように表現するのか、また、表現したいのか、どのように事象を捉えているのか」を考察する基盤となった。「自立活動」は「コミュニケーション」などの6つの内容が基本となり構築され、社会で自立して生きていくこと、ひいてはキャリア形成へとつながるものである。

本年度より定時制課程の三部制総合学科高等学校で勤務することになり、アート・デザイン系列で指導を始めた。生徒が美術教育で培った感性や創造的な表現、鑑賞の能力を社会で活用できるような実践を志向してみた。

### 2. 本年度の実践

本校の授業では1～4年次生の異年齢層が混在している。しかし、美術Ⅰは必履修科目の一つとして位置付けられ、1年次生のみと、2～4年次生がほとんどのクラスでは年齢層に差があり、理解度や投げかけへの反応などは大きく異なる。そうした中で、「美術Ⅰ」と「絵画」にて「抽象絵画表現」の授業を行った。設定のきっかけは、本年度6月の教育実習において、実習生が「抽象画」を研究しており、本校の卒業生であったことから作者（実習生）に直接会って作者の意図を聞くことができる良い機会となると考えたからである。

「抽象絵画表現」では、作家として、モンドリアンとカンディンスキーを取り上げた。

美術の教科書の中で、この2名の作家が「抽象絵画の先駆者」として取り上げられていたこ

とを根拠としている。クラスにより、2つのテーマ（A）（B）に分け、美術科全体で3週間にわたり行った。

この両作家は、第二次世界大戦の終着を見ずに1944年に没している。その中で、カンディンスキーは音楽に触発され作品を生み出しており、音楽の紹介も導入でおこなった。

（A）モンドリアンの制作を模擬体験することを介して「樹木を抽象化する」：具象として樹木を描く→特徴を捉える→さらに特徴を強調し、抽象化する→批評会（自分の作品・友達の作品の感想）

（B）カンディンスキーの制作を模擬体験することを介して「自分の好きな音楽を抽象化する」：カンディンスキーの作品の変遷と、母国ロシアや同時代の音楽を鑑賞する→自分の好きな音楽を準備する→3原色のみを遣い混色して抽象的に表現する→色を遣わず抽象的な形で表現する→形に色を入れてみる→批評会（自分の作品・友達の作品の感想）

教育実習生は（A）の授業について行い、自分の大学で調査し「自身の作品についてと生徒への問いかけ」「カンディンスキーの馬の絵の変遷」「モンドリアンの自画像の変遷」などをスケッチブックにまとめ、鑑賞の授業を行い制作のまとめと批評会を研究授業とした。

「抽象絵画表現」の授業により、生徒には以下のような変化がみられた。

まず「抽象化するとは何か」についての質問がたくさん出た。「抽象化するとは、部分を描くということか」「変化させるということか」「教育実習の先生が言った棒人間が自分には解りやすい」「木ではあっても木ではないように描くということか」などである。

音楽を解釈する授業では、生徒から「詩」や「動画」等の自分のイメージを強化する資料が、教員へ送られてきている。自分の好きな音楽のCDジャケットの特徴を報告してきた生徒もいる。

こうして、生徒は悩みながらも、絵を大きく変化させながら制作していった。特に4年

次の生徒2名は、充実した作品を仕上げた。



講評会では、生徒のお互いの感想をカードに書き込み「絶対に私には考えつかないような絵」「色が暗いがとてもまとまった作品になっている」「おとぎ話の世界のようだ」「木を描いてもこんなに色で表現できるのだと思った」「外国の人の作品みたい」などが出された。

### 3. 高校生に鑑賞で学んでほしいこと

手立てとしては、制作の前に鑑賞教育を行いイメージを喚起することが比較的多く、生徒はそこで得た考え方を、制作の土台として活用している。また、生徒同士で批評しあうことも大切にし、このことは以下の「高校生に鑑賞教育で見つけて欲しいと考えている観点」につながっている。

「他者を理解すること、理解しあうことで、コミュニケーション能力を高める」

「作品・製品等をよく観察し考察することで、社会に目を向け気づく力をつける」

「抽象絵画表現」の授業実践へは、「チャレンジスクールの生徒の心情を考慮してという理由から、講評会のやり取りは本人と担当教員が把握できるに留まっているが、今後言葉で考察、表現、感性を語りあうことは、生徒の社会性を育てるためにも大変重要な教育となっていくだろう。そこへの発展を考えて進めて欲しい」と示唆をいただき、来年度へ向けて考察を始めた。

### 4. むすびにかえて

「鑑賞」にはすばらしい題材が数多くある。その中で一つを深く掘り下げることで、生徒は社会での人間の営みへの理解に結びつけていくことができる(\*1)。来年度もモンドリア

ンとカンディンスキーの抽象画を追体験する授業を行いたい。例えばその時代の戦争に作者がどのように影響を受けたか、また、色彩を物の形から独立させていくことは人々の感性を自由な方向に進ませることになり、それが現代の芸術やデザイン、社会事象に結びついているのではないか。また、日本の美術は絵画の抽象化に大きな影響を与えている(\*2)。カンディンスキーでは音楽、モンドリアンは植物が枯れていく状況の変化で時間を表現した作品もあり、それらに触れ、追体験することを通して、生徒の感性を引き出し、気づき、言語化し、生徒同士のやり取りを深めていく方法が考えられる。

「生徒が感じた疑問点を共に研究し、考える力、問題解決の力、複眼思考を育てる」という美術の鑑賞教育は、高等学校の他教科との連携も必要となってくると考える。先に述べた特別支援学校の「自立活動」は、アメリカ合衆国での個別教育プログラムに大きく影響を受けており、それは社会で生きるために必要な力・教養を育てる目的をもったものと理解できる。例えば全米教育協会は1894年時点で歴史科の目的として①観察・識別能力②成立する論理を移し変える論理的能力③比較・判断力をあげており、それは鑑賞教育の基礎となると考えられる(注)。またハーシュによる『中学校の根本原理』の7つの観点は、現在の特別支援学校における「自立活動」の内容とほぼ重なる(注)。美術の鑑賞教育は今後、教科の縦割りを超えた総合学習としても大きな役割を負っていくと考えられ、生徒のキャリア教育の礎ともなるものとする。

参考文献 (\*1)伊藤氏貴(2010)『「奇跡の教室」エチ先生と銀の匙のこどもたち』小学館 p.20 (\*2)カンディンスキー&F. マルク編(1912)『青騎士』岡田,相澤訳 白水社 p.138 (注)三浦軍三,佐藤亨(1998)『「教養」と世界的視野形成の“米国史”学習指導内容構成の改造』東京学芸大学紀要 p.175-7